

近代仏教の諸相

——共生会の本願観——

桑 原 恒 久

共生会における本願の受容を考えるに当り、大変示唆に富んだ指摘を提示したい。

「日本においては、すでに仏教伝来以前、他界信仰の宗教的基盤が定着していたのである。かかる他界信仰が浄土教信仰と習合してゆくのは必然的であつた。むしろ現在においては、名目上は浄土教信仰のごとくでありながら、その内実は全く他界信仰以外の何者でもなく、ただ浄土教という名の前仏教的、前浄土信仰たる他界信仰があるだけ、という状況も考えられなくないのである。いわば他界信仰によつて浄土教の本来性が吸収されてしまつてゐる。といった点が考えられる。伝統的信仰と外来信仰（大乘仏教）との相克はそれ自体、われわれ日本人にとつて最大の思想的課題の一つであるが、恐らく法然上人における「捨此往彼 蓮華化生」の精神の背景には、伝統的な日本の他界信仰を不可欠の媒介としつつも、浄土教の眞精神を開陳する点にこそあつたのであろう。しかしながら安易に浄土教を、そのまま「捨此往彼」のごとき表

象に終始せしめるならば、かえつてそれは浄土教そのものの否定にも連なりかねない点も出てくるのである。浄土教はどこまでも大乘仏教の原点へ還つての絶えざる反省がなされなければならぬのである。浄土教とは「浄土に往生する教え」という不可欠の契約を有しながらも、より本来的には「浄土による救済を説く宗教」として、どこまでも浄土に即して大乘菩薩道の実践に連なる契約を有しているからである。¹この指摘こそ、共生会運動の理念を、端的に語るものといえまいか。浄土教とは浄土教信仰の中樞をなす阿弥陀仏の本願とその力用を、浄土からの力用として受容しつつも、捨此往彼という立場での捉え方に先立つて、まず現世を生き往く導因として、法界に満つる「生かしの力」として受容してゆこうとする思潮であるというのである。

本願とは言うまでもなく諸仏が因位に建立した宿願であり、衆生救済や当該諸仏の仏国へ人々を摂取する誓いでもあるわけであるが、必ずや「力用」を備えるものとされ、果位に転

じた仏、如来より下向して、菩薩、人天へと回向される。我々は「信仰」によって、この力用に乗託することとなる。

この本願について、共生会の師表、唯尾弁匠は次の如く理解の程を示す。

「さて、大乘經典なるものは三種に大別する事が出来る。即ち空經、心經、願經の三つである。先づ空經の説く所は諸法は空なり、第一義論に帰結する。絶対は平等であるという義で、仏教的考察法として出世三眼中の慧眼である。この慧眼から見る事が第一歩とせらるゝ、この慧眼は理から云えば縁起で、天地万有は縁起に依るとする。それ故、空を説く經は縁起を云ひ、慧眼を説いている。般若部の諸經が即ちそれである。……次に心經に説く所は実相の応の法界である。単に空、平等、中道によらば無味なるものであるが、それに対して此れは色心世界を挙げたる森羅万象如々の妙相である。冷やかに空平等等と考えるよりは宗教的に価値がある。法眼の事を云ふものは般若にもあるが、これは縁起的のもので、法の法たる処は有を真に破りたる相である。華嚴部の諸經、就中、華嚴經がその代表である。最後にこの主觀的のもの、即ち心の中心の完全に現れたのが三眼中の仏眼である。換言すれば社会的に完全なる覚醒進運をなす事である。これは即ち願として現れて来る。宇宙が物質であるか精神であるかを明らかにするものが慧眼で、心が正であるか否かを明らかに

するものが法眼で、心の本質的の最高価値が願であり、その現われが仏眼である。正しい目標に向かつて進むときそこに信が在り、信が統一的に實際のものとなる時、願が顕われる。心の中心が信より願に達し、これが普遍的なものに広がるのである。阿闍仏国經、無量壽經等がそれである。妥当なる願は最も単一なる要求が一切法界にわたらねばならん。この時に当り四十八願よりなる無量壽經は最もその価値がある。……

一切法界の衆生を救う為には願は普遍的にして且つ具體的たるを要する。又積尊の眞生命が願の究竟にあると見る時、本經は最もよくその眞精神を現はしたものである」。

右の如く椎尾氏は、仏教を仏願の頭われと見、その救済力の現世的功用に着目している事が分る。

それでは、四十八種の願種によつて成り立つ仏願について、その受容姿勢を更に確認してみよう。同氏は『觀經疏』散善義の

決定深信彼阿彌陀仏四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力決定得往生
を解して

「わが今日の生活は一切共同力の上のものであると気づくことが、すなわち「四十八願攝受衆生乘彼願力決定得往生」の要領であります。宇宙の發展が覚醒意志となり、意志の選択決定が願力となり、願力の選択が四十八願意志となった。そ

の意志には一点の自己のためにし終えるものなく、その身もその浄土もあげて衆生のためであり、私どものためであつた。……全財産力が社会公人として集められ、社会進化の経営に投じられ、万人のひろく享有する公園となり公舎となつたようなものである。これが阿弥陀の四十八願をもつて衆生を撰受するということであり、われらの進歩も向上も真生も、しかして未来永遠の大生命も、ただこれによるべきがゆえに、彼の願力に乗じて定んで往生を得るというゆえんであります。^③」と語り、四十八の本願とは宇宙全体が我々に働きかける生きる力、導きの力であつて、法蔵菩薩（弥陀因位）の選択として具体的に明文化され、提示されたものと受け止めるのである。又、四十八の願を各々願種によつて軽重を計るといつた各別なる扱いが見られないことは注目するべきであらう。そして同氏は、我々が生きる上では善美を求める生き方が重要だとし、その誘導因も仏願力であり、生きる上での目標、理想の像こそ、極楽浄土そのものであると説述するのである。

更に、この極楽浄土は、衆生にも働きかける当体であるとして、同氏は次の如く示す。

—極楽は大願の世界となり—と題し

「浄土経では四十八願成就して極楽たることを主張いたしますが、その願数には差支えないのであります。要するに極

楽は一切が完全に統制調和する力となるところであります。一切のものは善き方に向うときと、各々異なつた方に向かうときとあります。異縁逆縁の場合はどうすることもできませんが、一切の縁が整いますとそこに一大進化力を表わします。大信、すなわち恭儉な態度で信願いたしますればこの御力を受けることができますのであります。この態度をもつてここに札すればかしこに來迎し給う御力であります。如来のお力はいかなるところにも完全に導き給う強増上縁であり、天地一切を通じて向上せしむるのであります。かかる御力に満たされたところが大願の世界であります。かように如来の力はある特別のことにのみ与えられる力ではなくして、一切にはたらきかける力、強増上の力、大願の力であります。^④」。

四十八の本願を全文酬因感化の力用として捉え、浄土による救済の力と受け止めるべきことを示している、当然それが働きかける場合は、この現実界ということになるのである。

更に「山の色も溪の声もみな如来の説法と受けとられ、ことごとく念仏、念法、念僧の心を生ぜしむるものと考えられるときは、すでに一段を進めて如来力が仏力として働いてるのであります。如来は力であり仏は覚醒であります。もし体・相・用の三大より論ずるならば如来力はまさしく本体であつて、仏教の基礎でもあります。^⑤」

右の如く、本願を四十八願全分にわたる力用とした上で、

この娑婆世界に時々刻々と働きかける進化生成の源であることを具体的に示しているのである。

これらの論結は、同時に、椎尾氏の立脚点である大乘仏教論の中に位置づけられる必然性をおびるものである事は言うまでもない。

同氏はこれについて、

「見縁起」者見法、見法者見仏」として説明する。縁起を了解すれば法が了解され、法が了解されれば仏が了解できるといふ。

つまり、法性の道理（法。ダルマ）とは即ち縁起の理であり、即ちこれが諸法無我を説く仏教の根本原理であるといふのである。

そして、先に示した仏力を衆縁力として比定しつつ、この両語を総称して天地の大自然力（大恩力）、全法界の力等と表現して、より分り易く説明しているのである。

氏は縁起という大乘仏教の根幹を貫ぬく理を、大悲門としての浄土教の流れとして受け止め、この縁起の諸法を大慈悲の働きとして再釈し、縁起実現のあたたかき育ての命を無量寿光たる阿弥陀仏の本願の働きとして受け止めるのである（中国、善導大師をはじめとする、所謂法然浄土教の法流は、正にこれを表わしたものと同氏は理解する）。

衆縁によつて生起しているのが我々人間を含むあらゆる存

在である。その淵源たる弥陀の力こそ、総てを生かす善意、慈悲の現われであると領解し、これに謝し帰命する表相として「南無阿弥陀仏」を位置づけるのであった。

かくなる認識の上に立つて、生命と世界の実相及びかわりを、積尊成道の中心命題でもあつた縁起の法に求め、人々に「真実に生きる道」として教示したところに、共生会運動の実践理念があつたものと理解出来よう（一方、同氏は念仏の修相として尋常の生活そのものを重視し、「ただ、往生極楽のために、南無阿弥陀仏と申す」念仏であるとも規定する。しかしこの場合の往生極楽とは、即ち永遠に真実の生命が客観化せざれば止まず、という意識であるといふ。更に三業四儀の所作の全体が尊き念仏生活そのものであるとも教示している点も合わせ理解すべきであろう）。

又、この仏力を、同氏は如来力とも表現し、全て我々に分有せられる力でもあると指摘し、その活現を完うすることを覚醒と称しているのである。

法界縁起、一念三千、草木国土悉皆成仏、一切衆生悉有仏性等の諸経旨、理念を立脚点とし、相即相入、入我入する全仏教の見地を包摂し、これを釈尊のさとり of 必然的進展であると捉え、その上に阿弥陀仏を中心とする念仏論（本願論）を展開したのであつた。

冒頭における共生会の本願観を総括した文中にある「浄土

による救済」に關し椎尾氏は

「また浄土教は四十八願を渾一して仏身とも仏土とも撰衆生ともみるとすれば仏身土をも渾一にみる。すなわちまとめながめる。全体が阿弥陀であり、全体が浄土であり、全体が救いの力である。いかなるところにも弥陀の全力があらわれるとみる、これを明らかにするとき、すべての問題がすらりとわかつてくる。宇宙法則の力が満足にもつとも眞実なる力としてあらわれてくるのが浄土教の究竟一乗であつて救い救われるという特殊なものではない。救われることも自己の善根等にあららずして一切救済にあづかるのである。これ本質の上に合一することで、善導大師觀經疏玄義分の発迹入源というのはこの意である」。

この様に示して、四十八種よりなる本願による救済を渾一同体のものでした上、眞如法性の顯われに他ならないとみてゐるのである。

以上、共生会の本願受容について若干の検索をしたわけであるが、当会の見解について特色的な点のみを列挙すれば、次の如くならう。

一、仏教の究竟を仏（弥陀）の願（本願）として捉え、これを説く『無量寿經』を最高価値を有する經説とみる。

二、本願による救済を大乘仏教の根幹理念としての縁起の慈悲救済の働きとみる。

三、四十八の本願を渾一のものとして捉え全分性法の顯現（社会、人間全てを生かし、進化し、向上せしめる力）と見る。

などとなる。椎尾氏はこの縁起を「共生」として表現し、眞実に「生きる」仏教を提唱することとなったことは言うまでもない。

雜駁ではあるが、共生会の理念を本願を中心に一瞥した次第である。

- 1 「現代と念仏について」『浄土教文化論』河波昌。
- 2 「願經に就いて」『浄土学』一、六頁。
- 3 『共生講壇』一八六頁。
- 4 「極楽十相」『共生』昭和八年十一月。
- 6 『共生講談』一九五頁。
- 7 同右 一八六頁。
- 8 「人間の宗教」二五六頁。
- 9 「宗乘の省察」『共生』大正十四年六月。

（キーワード）本願、共生、浄土、椎尾弁匡、念仏
（大学講師）